

# 藤並の森

Vol.2

高知県立文学館

●写真提供●松村一位氏



## リレー随筆② 台風——東京と土佐

安岡章太郎

今年は台風が少なかった。八月の終りに四号台風というのがあったが、これも存在感のハッキリしない台風だった。

台風は大抵、西南方から東へまわってくる。ところが今年はいきなり水戸とか、北部の那須とか、例年ほとんど台風の通らないところに豪雨をもたらし、各地で大洪水を起した。しかし、これも東京には殆ど影響がなく、むしむしと暑い日がつづいただけだ。しかも、北上する速度がきわめて遅く、出たり入ったり、ジリジリと接近しては何處かへ姿を消す。

九月の下旬になつて、秋の彼岸の頃に現れた七号、八号は、ようやく西から現れた。テレビでは足摺岬、室戸岬など、いつも年なら台風シーズンに真っ先に出てくる風景が、やつとテレビに映りだした。高知市街の舗道に水が溢れ、風が押し出すと、その水が泡立つてどつと流れる。いかにも土佐らしい。

しかし、その七号、八号の台風も、東京では眼につく姿は何もない。とくに八号は、七号に追い抜かれて消えてしまった。それが彼岸の前日から中日へかけてのことだ。一日じゅうドンヨリと曇った空から、小雨が時たま、二滴バラつくとそれきりジッと止まってしまう。その代り、目に見えぬ温氣と湿気が一日じゅう垂れ込めて、頭の

上から重苦しく压してくる。じつにイヤな気分だ。耳が両方とも詰まつて耳鳴りがうるさいほど鳴りづける。その上、ひどい蒸し暑さだ。外を歩くと、時どき風が吹く。するとシャツの下に吹き出した汗が、生ぬるいシャワーのように流れるのがわから、これが妙に薄ら寒い。頭は果然となつて、何もする気が起こらない。向うから、中年の男が一、三人、連れ立つてやつてくる。なかの一人が白い歯を見せて笑っている。——人はさまざまだ、こんな不快な日によくも笑つてられる、と却つて感心させられる。

以前、鏡川の氾濫したときの光景を憶い出した。これまで水に浸つたことのない築屋敷の土堤の家々が、一軒残らず浸水して、畳を上げているのを偶然、私は高知へ出掛けて目撃した。翌日、同じ場所へ行つて見ると、河原の一本の木の枝にシャツや衣類が引っかかつて日に照らされているのが目についた。上流から流されてきた人のものらしい。すでに河岸に水が引いた跡に、ギラギラと強烈な日差しが何とも不気味な眺めだった。

その後の情報によれば今回九月二十四日以降、土佐を襲つた雨台風の被害は大変なものようだ。心から御見舞申上げる。

(高知県立文学館名譽館長)

◆次回企画展によせて◆

# ヴィジョネール 片山敏彦の世界

会期—十月十日(土)～十二月十三日(日)



晩年の片山敏彦

ロマン・ロラン、ゲーテ、リルケ、ヘッセ、カロッサといった仏独の多くの作家や詩人のすぐれた翻訳者、紹介者として知られている片山敏彦、また西欧の美術や音楽についても常にその本質に触れる、エッセイや評論を数多く残した彼は一九九八年十一月五日、生誕百年を迎える。

片山敏彦が、生まれ育った家は、高知市のほぼ中央、高知城の東隣に位置する、山内容堂の生母の邸跡にあった。(現在天理教高知教会敷地内)。父徳治は、県下内科界の権威者として仰がれる有能な医師であり、敏彦は、片山家の長男として誕生した。幼少より画才を發揮、後に大調和展、国展などにも作品の数々を出品している。

家督を継ぐべく医師を目指すが、六高時代、ゲーテの『タウリス島のイフィゲニエ』を読み感動、西欧の文学を志すきっかけとなつた。又、大学時代ロランの『ジャン・クリストフ』を読みロランに興味を持つようになる。

大正十三年、東京大学文学部ドイツ文學科を卒業後、法政大学予科教授となる。大正十四年ロランに手紙を書き、長文の返事を受け取り、「彼から与えられた精神

の種子を生かし切ること」を決意。「ロマン・ロラン友の会」を設立。翌年、ロランの『愛と死との戯れ』の翻訳をし、築地小劇場で上演する。昭和四年渡欧、ロマン・ロラン、シュテファン・ツヴァイクおよびアベイ派の詩人たちと交わり傾倒、昭和六年に帰国する。昭和七年から二十年まで第一高等学校教授。その間『ロマン・ロラン』(昭和十二年)『心の遍歴』(昭和十七年)『詩と友情』(ドイツ詩集) (昭和十八年) 等を出版。

昭和二十二年から一年間、東京大学文学部で比較文学を講じている。

以後昭和三十六年一月十一日に死去するまで、『ロマン・ロラン全集』、『ツヴァイク全集』の日本訳監修他著作に専念。『詩心の風光』(昭和二十一年)『紫水晶』『詩と文化』(昭和二十二年)『リルケ』『愛と孤独』(昭和二十三年)『雲の旅』(昭和二十四年)『幸福論』(昭和二十七年)『泉のこだま』(昭和三十四年)などの著書がある。

また、彼はすぐれた詩人でもあった。彼の詩集として、生前に刊行されたものは、次の三冊がある。

私家版の第一詩集『朝の林』(昭和四年)は、「歩む人」より発行。

この詩集には、初期の代表的な作品である長詩「母」をはじめとする四十三篇の詩が収められている。

第二詩集は昭和十九年に発行された『暁の泉』である。発行者は、敏彦自身であり、奥付けに記されたおり「佐々木斐夫」という献辞が付されている(五〇〇部・非売品)。冒頭の「わが人生とは」など四十六篇が収録されている。



ロマン・ロラン、アルベルト・シュヴァイツァー、ジョルジュ・デュアメル、シャルル・ヴィルドラックなどから送られたサイン本



ロマン・ロランからの手紙

ロマン・ロラン著『ジャン・クリストフ』

原書と片山敏彦訳稿



〔花〕 一中時代に描いた作品



[王佐の海] 片山敏彦 画

そして、生前最後のものであり、自選詩集である「片山敏彦詩集」は昭和三十年、彼が六十歳のおり、みすず書房から刊行された。三百頁を越す厚さのこの詩集は前二詩集からの若干の詩篇に加えて、「暁の泉」以降の作品から多くが収録され、その総数は百五十八篇。著者は「三十余年から今年にいたるまでの詩作の中より選んでこの一編を編んだ」と記しており、いわば、片山敏彦にとって、自らの詩業においての集大成ともいえよう。そしてその扉には

詩人は日毎地下の聖堂に祈り  
樹の梢を  
歌ふ琴に変へる

の三行が書かれている。

言うまでもなく、地下の聖堂と言うのは、世界の根底にある目に見えないものであるとともに、自分の内面の究みにある聖なるものを意味している。

一九六一年秋、片山敏彦は六三年の生涯を終えたが、最後の数ヶ月に病床で書き連ねた詩、短歌、断片などが遺族の手によって、『片山敏彦遺稿』として編纂され、身近な友人・知人に贈られている。

その他にも、『ドイツ詩集』『ゲーテ詩集』『ハイネ詩集』『ヘッセ詩集』『リルケ詩集』『カロッサ詩集』『世界詩集』など、厖大な量に及ぶ訳詩や、『雲の旅』『千曲川畔日記』『ヴィラ・オルガの思い出』などのエッセイが数多く残されている。又、一九二九年片山敏彦に会ったロマン・ロランはその日記に「彼はヨーロッパ芸術のあらゆる領域にあって非常に教養があり、また我々に関するについて、ほとんど我々と同じくらいなんでもよく知っている」と記しているが、それだけに彼が生涯書き残した評論（その中でも批判的評論は、著しい数に上っている。

そして、生前最後のものであり、自選詩集である「片山敏彦詩集」は昭和三十年、彼が六十歳のおり、みすず書房から刊行された。三百頁を越す厚さのこの詩集は前二詩集からの若干の詩篇に加えて、「暁の泉」以降の作品から多くが収録され、その総数は百五十八篇。著者は「三十余年から今年にいたるまでの詩作の中より選んでこの一編を編んだ」と記しており、いわば、片山敏彦にとって、自らの詩業においての集大成ともいえよう。そしてその扉には

片山敏彦の探求と選択と創造の世界はきわめて個性的であり、それは時代と環境への強烈な否定であつてはじめて可能となつた。内面的な経験の結晶として彼の詩文が示すものは、彼の精神が受容しえない社会との格闘における、一貫した自己の持続であつた。その精神の音色は、格闘の混濁を一切留めず清澄の光を帯び、無垢の自然そのものの美しさをもつている。

当時の日本の精神風土において奇跡的ともいいうべき孤独に対する強靱さと精神形成の徹底は、日本の文化に対し、かつて持つことのなかつた富を与え、その視野を人類の地平に拡大していった。眞の批判は全体の批判として現われる。否定を媒介として、文化の更に高い次元は形成されるが、我々の文化的伝統において、その生きた表現者こそ、彼であった。

虚名を追うジャーナリズムも、理論の凡庸に安住するアカデミズムも、彼の視野の外にあった。彼の希望は、未来の人びと、若い人びとにあり、彼らのナイーブな心の悩みに對して、切実に全身的に應えようとした真摯さは、まさにこの人のものであつたといえよう。

人が生きていく上で根元にある魂の問題や、芸術表現の永遠の課題である象徴性について深く探求した彼の作品の数々は、いつの時代にも人々の心をとらえ離さないであろう。

今回の企画展では、土佐における少年時代とその家族、医学から西欧文学への傾倒と彼のヨーロッパ時代、戦争への道を歩む国家への抵抗と彼の偉業の数々など、遺族や友人よりお借りした、生原稿、著作本、原書、絵画等、約200点を通して、御紹介します。片山敏彦誕生100周年特別企画「ヴィジヨネール・片山敏彦の世界」展を是非ご覧ください。

### 【主な出品資料】

ゲーテ著「タウリス島のイフィゲーニ工」原書、片山敏彦訳稿、訳本。  
ロマン・ロラン著「ジャン・クリストフ」原書、片山敏彦訳稿、訳本。  
遺稿集「ときじく」和紙原稿等生原稿。ロラン・ロラン等著名な作家からの献呈本、ロマン・ロラン、ヴィルドラック、野上弥生子、草野心平、谷川俊太郎等からの書簡。敏彦の絵画、遺愛品など約200点。

### 【関連催し物】

片山敏彦生誕100年及び高知県立文学館開館1周年記念講演会

日時：10月31日(土)午後2時～午後4時30分  
場所：県民文化ホール（グリーン）

### 第1部

#### 記念講演

演題「片山敏彦のくふるさと」

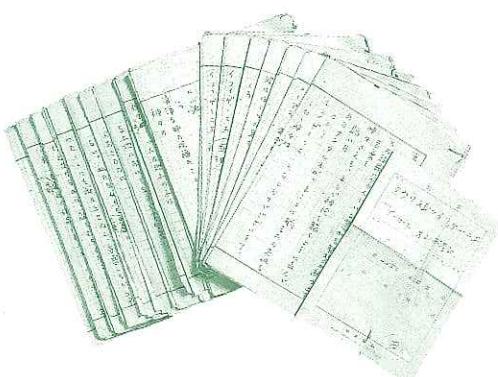
講師：早稲田大学文学部教授

清水 茂 氏

### 第2部 片山敏彦を偲んで…

#### 対談とヴァイオリンのつどい

\*岩淵龍太郎氏（ヴァイオリニスト、京都コンサートホール館長）と青木やよひ氏（ノンフィクション作家）による対談  
\*岩淵龍太郎氏によるヴァイオリンの演奏



『タウリス島のイフィゲーニ工』訳稿

「ロマン・ロラン」  
片山敏彦 スケッチ画

ロマン・ロランの母手作りのレース

## 学芸員メモ

## 「大河内正敏宛て 寺田寅彦留学 絵はがき」から

昨年当館の開館記念特別展「師弟が見た近代漱石と寅彦の留学体験」に際して、千葉県船橋市在住の藤代治康氏より氏所蔵の寺田寅彦の大河内正敏宛ての未発表の留学絵はがきはがきは四点を展出いただいた。その中の明治四十二年七月二十六日付けの絵はがきは当時、寅彦と大河内の間で進められていたある実験に関する事柄について触れている。それは次の通りである。

昨タドレスデンより帰着致候。寫真展覽會は以外に有益に候。クランツの寫真も大抵出品されて居る。其中例の↑↑↑は弾が銃口を出る時銃のVerriegelungを計るもの説明してあつたがよくわからなかつた。其他子一ゼンの——も出て居るし、又弾の中へ種板を入れ弾の頭に穴をあけて日光を入れ此れでベンデルグを測るのもあつた。又ラケッテに寫真機に暇あらずリップマン寫真も始めて見た。望遠鏡で太陽の黒点も見た。要するに中々面白かつたから御紹介致します。一日では少し不充分でした

七月廿六日

寅



この書簡を送られた大河内正敏（一八七八年一九五二）は寅彦の親友で、後に理化学研究所所長となり、発明・発見の成果を企業化し、科学工業コンチエルンの総帥となつた人物である。当時、大河内は東大造兵学科在籍中で寅彦の留学五ヶ月前の明治四十一年一〇月に渡独していっていた。ベルリン到着間もない四十二年五月十四日付けでゲッチンゲン滞在中

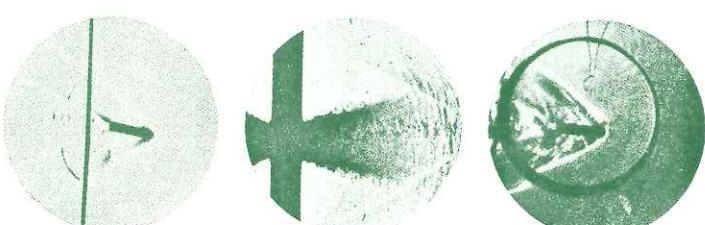
昭和四十二年七月二十六日付  
大河内正敏宛て 寺田寅彦留学絵はがき

の大河内に宛てたベルリンの元の大河内の下宿に一時身を寄せていることが書かれている寅彦の絵はがきもある。前掲の絵はがきにドレスデンの写真展覽會で見た最新の写真技術を大河内に伝えているが、この中に寅彦が大河内と共同研究した弾丸の飛行写真に関する記述があり、「クランツの写真も大抵出品されて居る」とある。ここにある「クランツ」とは弾丸及びこれに伴う気波の写真の撮影に成功したドイツの科学者クランツ教授のことである。寅彦と大河内が弾丸写真の実験を始めたのは「思想」特輯（寺田寅彦追悼号（昭和十一年三月 岩波書店刊）に掲載された大河内の回想「寺田君の憶ひ出」によると、明治三十七年頃の

先年此の器械を買入れる事が出来たので早速実験に着手したが照光装置に必要な発電機がなかつたため一時中止して居た。昨年の夏に至つて器機が揃つたから再び実験を始め」とその事情が述べられている。この「火兵学会誌」にある問題の発電機は前述の「ウイムシャースト發電機」と思われる。再開された実験は板橋火薬工場の射的場でその年の八月から始められ、大河内がドイツに出発する直前に寅彦の手によつて論文「SOME PHOTOGRAPHS OF PROJECTILES IN FLIGHT [Proc. Tokyo Math.Phys. Soc., IV, pp.398-404, 1908]」として発表されている。

その大河内の回想に寅彦の研究対象に向かう態度が端的に表されている箇所がある長くなるが抜粋してみる。「歩兵銃から打ち出された小銃弾が、豫め薄い金属板に穿たれた、圓い孔、四角な孔、三角な孔等を通り抜ける時の瞬間寫真を、シリーレン法で寫して見ると、色々な形をした空氣の波と思はれるものが出来る。大した問題でもないから好い加減にして置かうと思つたら、寺田君は承知

しない。若しこれを空氣の波とすれば何んで出来たか説明しよう。君一つ調べろと云ふ。仕方がないから、先づ参考書か専門雑誌で、今まで何か似た研究はないか調べて見ようと思って、寺田君に教へを乞うたが、其時の答へが私の云ふ奥の手であった。文献などを調べて何がある、寫真を眺めて何時迄も考へて見給へ何か出て来るよと云ふのであつた。誰れに聞け、何を調べろ、何を讀めと云ふやうな手は駄目だ、何もせずに黙つて考へると云ふのである。黙つて眺めて考へ込む、今日うまい考へが出なければ、寝てゐて考へる、目がさめたら又考へる、毎日同じことを繰り返すのである。果して考へが出て寺田君に話すとそれに違ひない、



弾丸の飛行写真  
「SCIENTIFIC PAPERS VOL. I」  
T. TERADA  
(1939.3 岩波書店刊)

## 閲覧室から



『岡本彌太詩集——山河篇』

今は亡き高知の詩人で、今日もなお愛され続けている詩人の筆頭は、やっぱり岡本彌太であろう。毎年十二月二日には香我美町岸本の詩碑前で弥太が開催され、地元小学生たちによつて弥太作詩の「わが涙」が今も歌い続けられている。生前上梓し得たのは『瀧』一巻のみで弥太自身も第二詩集『山河』を世に送り出すことを願つていたが、生前その夢はかなわなかつた。その出版予告を「日本詩壇」誌上に発表してから七十余年、まさに時空を超えて『岡本彌太詩集——山河篇』は世に出された。

監修の山川久三氏、発行者の川島源太郎氏ほか、弥太を愛する多くの関係者の熱い思いがこの小さな一冊に籠められてゐる。永瀬清子、上林鶴夫両詩人の「詩集山河に寄せて」も光る。

秋の一日、詩人の切なる思いが凝縮された珠玉の詩篇をゆっくりと味わつてみませんか。来年は岡本彌太誕誕百年です。

(平成十一年一月、山梨県「泰樹社」刊。限定千部。五千八百円。) 文学館でも販売。

(佳)



大河内 正敏

それで説明がつくと喜んだ。最後に、この弾丸の飛行写真の実験について、科学と文学の接点に関わるエピソードがあるので御紹介する。寅彦が漱石の小説の登場人物のモデルとなつたことは有名で

あるが、『三四郎』の東大理科大学の穴倉で研究生活を送る理学士野々宮宗八を上京したばかりの主人公三四郎が初めて訪ねる件で野々宮は三四郎に光線の圧力の実験を見せる。

実は漱石の最初の構想では、弾丸の飛行写真の実験が採用される予定だつたらしく。寅彦の隨筆『夏日漱石先生の追憶』には寅彦の実験室を漱石が見学し弾丸の実験を小説に書くがいいかと訊ねられるのでそれはちょっと困りますと答えている。そこで、代わりに寅彦がその頃読んでいたアメリカのニコルス・ハルの光線の圧力の論文の話をし、それが採用された。寅彦の日記にも明治四十一年八月十九日付けて『小説『三四郎』中に野々宮理

學士といふが大學にて銃丸の寫眞の實驗を行なせる箇所あり。改めて貰ふ』とある。寅彦の立場で考えると、この研究が再開されて間もない時期であり、大河内との共同研究で彼への配慮もあつたであろう。また、当時は文系と理系の垣根が高く、寅彦自身が小説を書くことへの批判もあつたということもあり、研究中の素材を提供すること自体はばかられたのかかもしれない。

(北川かおり)

## 県内同人誌紹介



### 短歌芸術

『青苔』(あお苔)（あをすげ・アヲスゲとも表記している）の前に『南人』(なんじん)があり、『短歌芸術』の前身とされる。「南人詩社」(大正六年)をおこし「南人」を27号まで世に送つた中心的存在として有光滋樹(愁羊)がいたからである。『青苔』の発行編集は高知市新京橋有光写真館の有光滋樹。當時『写真芸術』なる誌があり、有光が『短歌芸術』と命名。橋田東声を仰ぎながら、師事しきれず、茂吉・憲吉・白秋らに私淑。写実を重んじ、各自の個性の尊重を第一にする。『国民文学』の松本ふじ子を擁し、女歌を重視し、戦後は『満洲短歌』の富田充、『櫻櫻』の依光亦義を迎へ、新しい詩的認識、さらなる自由な詠風をもつて現代短歌新時代に入つてゐる。

(佐藤いづみ)

昭和五年十月  
『短歌芸術』と改題、今日に至る。  
昭和五年十月  
『青苔』 8号を

連絡先 高知市曙町一一四一一七  
佐藤いづみ方 短歌芸術  
電話 ○八八八一四四一三一〇

夏目漱石著 『三四郎』 初版本  
(明治四十一年五月 春陽堂刊)



# 悼・岡林清水先生

8月21日午後1時18分、心筋梗塞のため突然のご逝去。77歳。

虚碧に漾う  
ただよ

—岡林先生と文学館—

橋田 憲明

岡林先生、その人がそのまま文化で  
あつた。あとにのこつた空洞をいま埋め  
ようにも、その手だけが見出せない。

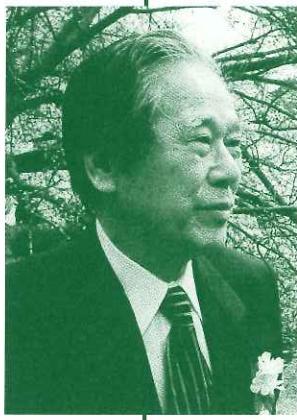
先生の世に残された大きな業績をふり  
返るとき、学問の礎はどう形成されてい  
くかを見るような気がする。過去から現  
在に向かって推し移つてくる流れの中  
に、個々を確かに位置づけて体系化する  
先生のような人、それは一時代に幾人も  
あらわれるものではない。それがなされ  
ないうちに忘れ去られてしまつたであろ  
う人が、いま生きかえり生きかえりした、  
先生の土佐文学のお仕事の大きさを目の  
あたりにみてきた。

岡林先生を悼む

高橋 正

突然でない訃報はありえないが、万年  
青年岡林清水先生の訃報は、先生を敬慕  
する多くの人々にとって、まさに青天の  
霹靂、あまりにも突然すぎた。私の場合、  
岡林先生も所属しておられた日本社会文  
学会企画の日口文学シンポジウム「トル  
ストイと現代」に参加、古都サンクト・  
ペテルブルグの夢のように美しい町並み  
を脳裡に残し、ツーラでのトルストイの  
曾孫ウラジミール・イリイチ・トルスト  
イさんの「今のロシアは混沌だが、二十  
世紀のロシアの精神的支柱はトルスト  
イの思想だろう」という印象深いメッ  
セージを反芻しながら帰国、帰宅したの  
が、八月二十三日、先生のお通夜の日で  
あつた。学会の先生方からの「岡林先生  
によろしく」とのご伝言をお伝えする由  
もなかつた。

先生にかかわっていたい文学館開  
設は、そのお仕事の延長であり、いい変  
えれば集大成でもあつた。県立文学館は  
昨年十一月二日に開館、開館に際しては  
多くの方々にご協力をいただいた。中で  
も先生には、館の基本構想の策定委員会  
から積極的な参加をいただき、開設準備  
委員会顧問として、さらに専門委員とし  
てご指導いただいた。とくにもつとも大  
切な展示の監修者として、展示構成から  
解説パネルの一言一句の吟味に至るまで  
ご教導を受けた。誕生の事情をつまびら  
かにご存知の先生は、「万感のおもいをこ  
めて開館おめでとうといいたい」と書い  
てくださつて。先生が世にのこして  
いたいに忘れてしまつたのである  
が、先生の土佐文学のお仕事の大ささを目  
のあたりにみてきた。



突然でない訃報はありえないが、万年  
青年岡林清水先生の訃報は、先生を敬慕  
する多くの人々にとって、まさに青天の  
霹靂、あまりにも突然すぎた。私の場合、  
岡林先生も所属しておられた日本社会文  
学会企画の日口文学シンポジウム「トル  
ストイと現代」に参加、古都サンクト・  
ペテルブルグの夢のように美しい町並み  
を脳裡に残し、ツーラでのトルストイの  
曾孫ウラジミール・イリイチ・トルスト  
イさんの「今のロシアは混沌だが、二十  
世紀のロシアの精神的支柱はトルスト  
イの思想だろう」という印象深いメッ  
セージを反芻しながら帰国、帰宅したの  
が、八月二十三日、先生のお通夜の日で  
あつた。学会の先生方からの「岡林先生  
によろしく」とのご伝言をお伝えする由  
もなかつた。

くださった文学館といえるほどのお力を  
尽くしてくださつた。心からの感謝の気を  
持ちを捧げたい。

文学館の行つた企画展「漱石・龍之介  
展」について、この八月五日高新区に掲載  
いただいた「漱石・龍之介展によせて」  
が先生の絶筆になつた。漱石の最初の創  
作集「漾虚集」初版本の書き入れを興味  
深いと紹介された中で「漾虚とは、中国  
の宋時代の雪竔重顕禪師の偈の中の『春  
水漾虚碧(春水漾碧)』(禅林集  
句)によつたもので、のちの則天が私  
に通ずる淡々とすみきつた心境、無に通  
ずる境地をあらわしている」と解説され  
ている。先生からいただいたご著書「土  
佐風土歴程」の扉に書いてくださつた「虚  
碧に漾ふ」という語のあつたことも想い  
出して、先生のいきついた境地がこの  
淡々と澄み切つた境地であられたろう

ご論文は大量でかつ多彩である。先生の  
ご専門は日本近代文学、特に高知の文学  
に比重をおかけたご研究であった。主要  
著書としては、「土佐近代文学史列伝」(共  
著 昭和三十七年)「高知県文学史」(昭  
和三十九年)「自由民権運動文学の研究」  
(昭和四八年)などが挙げられよう。  
臨地研究書としては、「土佐風土歴程」(昭  
和五十五年)「碑のなかの風景」(昭和五  
十九年)「高知県文学散歩」(平成三年)  
などがある。また創作として、歌集「浅  
き流れ」(平成五年)「長江―三国志の旅  
」(平成七年)がある。学術論文とし  
ては、「島崎藤村研究」「小諸なる古城の  
ほとり」をめぐつて」(昭和三十二年)  
「漱石『薤露行』研究」(昭和二十六年)  
「夏目漱石研究」「明暗論」(昭和  
三十四年)「森鷗外と浪漫主義」(昭和五  
十年)など百本近くが学会誌に発表さ  
れている。晩年は中江兆民研究に没頭さ  
れ、「一年有半」口語訳(平成九年)

と、今氣付くのである。

今一つ漱石が最後まで漱石山房に飾ら  
れていたという大正二年の自筆水彩画  
「朱衣達磨渡江図」について次のよう  
に紹介されている。「達磨はインドのベンガ  
ル湾から舟出して広東につき、北上して  
いまの南京で梁の武帝に謁した。「朕は寺  
をおこし、僧を度す、何の功德がある」  
と武帝は質問したが、達磨の答えは、「無  
功徳」(そんなものは何の功德もない)  
であった。武帝はあらためて「それでは  
禅の極意は何か」とたずねたところ達磨  
は「廓然無聖」(カラリとして「無」)  
とつきはなし、風の如く長江を北に渡り  
魏の嵩山の彼方へ消えて行つた」。

その絵の達磨のよう、先生は白い月  
かけの下の小舟に身を托してさらに求め  
る舟出なさつたのではないかとふと思う  
のである。(高知県立文学館長)

はその成果の一つである。

先生のご研究のメインは?といえば、  
やはり「自由民権運動文学の研究」を第  
一に挙げるべきだろう。明治の初め、土  
佐を発祥の地として全国に燃え拡がつた  
自由民権運動とそれに随伴した政治小  
説、つまり自由民権運動文学は日本の近  
代文学の母胎であった。この自由民権運  
動文学を、中央サイドではなく、土佐から  
の視点で、資料を博搜・駆使され、照  
射・追尋された点に先生のご研究のオリ  
ジナリティーがあり、注目される点であ  
る。今一つ、土佐の文学史をはじめてトト  
タルに捉えた「高知県文学史」はたいへ  
んご労作であり、高知の文学研究上の不  
朽の基本文献である。

先生と同じ道を歩む私たち後進は、非  
力はあるが、先生が点された高知の文  
学研究の灯をたやすことなく、一層の精  
進を先生のご遺訓にお誓ひして、追悼の  
辞としたい。

(徳島文理大学教授)

6月

◆2日 浜本浩遺族西村夫妻来館。◆5日 四

国博物館協会御一行来館。◆10日 現代詩人賞受

賞記念ミニ企画「岡文雄展」開幕(7/5まで)、

二階常設展示室内にコーナー展示。※片岡文雄氏

の詩集「流れる家」が首都圏以外では初の現代詩

人賞を受賞した。◆16日 俵万智氏来館。◆18日

片岡文雄氏来館。新聞社の取材に対し、ミニ企

画コーナーの前で詩人としてのあらたな決意を

語つて下さる。◆23日～25日 収蔵庫焼蒸につき

臨時休館。



“四万十大使”俵万智氏来館

容となつた。◆18日 夏季特別展「夏目漱石・芥川龍之介展」開幕(8/16まで)。※日本近代文

学館の協力による一部巡回形式で、直筆資料90点

を含む70点をテーマ展示。漱石と龍之介をわかり

やすく紹介したビデオを流す映像コーナーも併

設。また自由に持ち帰りできる展示解説ノートを

作成し、より深い理解をはかった。同日「土佐日

記」講座第2回。◆19日 特別展記念講演会「漱

石と芥川—その接点と差異—」開催。講師は早稲

田大学名誉教授・紅野敏郎氏。文学館1階ホール

にて※二人の文豪の作品と人生、さらに漱石の女性観や龍之介の苦悩などお話を多岐に及び、終了

後は参加者からたくさんの質問が飛び出した。◆

24日 芥川命日「河童忌」をとりあげた「おもいつ

きりテレビ」にて当館開催中の特別展紹介。◆26

日 映画「それから」(夏目漱石原作、森田芳光監

督)上映会。文学館1階ホールにて。

資料受贈報告

(平成十年一月～平成十年七月)

五十音順・略称略

▼片岡千歳・刊本「今日は美術館へ」

▼橋口明子・濱本浩・書簡・横関愛

造宛(葉書)ほか▼高知市市民図書館刊本「敷柑子集」の研究▼橋本嘉子・「評釋」万葉集傑作選▼鈴木健司・雑誌「論攷宮沢賢治」創刊号▼

田中眞知子・刊本「家族の情景」▼土

屋文明記念文学館・現代百人一首第4回特別展(展示目録)▼高辻玲子・

「続」獨逸だより▼理化学研究所・

雑誌「理化学研究所彙報」13輯8号▼

土佐文化資料調査研究会・刊本「社会主義の詩」▼山崎波浪・刊本「絶空事

一崎波浪句集▼岩原祐・「句集幽篁」▼同志社資料室・「蘇峰自

述ほか▼岩崎祐・刊本「出会い触れ合ひ写心旅」▼澤田恵・刊本「櫻巡礼」▼岡村修・刊本「岡本弥太の思想と詩論」▼和泉省作・刊本「月の詩」▼

森田進・刊本「詩人・大江満雄とハンセン病」▼木村哲也・刊本「大江満雄とハンセン病」▼木村哲也・刊本「大江満雄とハンセン病患者」▼森沢光・刊本「短歌集」水彩画の雑器栗▼黒田康嗣・刊本「詩集」不思議な流れ▼五藤慶子「合せ鏡」ほか▼中内光昭・刊本「DNAがわかる本」▼高知新聞社刊本「土佐の民家」▼藤本寿枝・刊本「歌集」斗賀野春秋▼竹本義明・刊本今村栄歌文集▼山崎修・刊本「土佐を歩く」▼中澤多津・「光と影」と▼國見純生・「歌集」虹▼菊池時夫・雑誌「雪水フォーラム創刊号」ほか▼藤本綾子・雑誌別冊太陽No.11・刊本「歌集」浅き流れほか▼萱野笛子・刊本「詩集」音の自画像ほか▼今井盛章・刊本「父の償い」▼横川正郎・刊本「維新志士の手紙」▼片岡文雄・刊本「土佐方言詩集」いごつそうの唄

「歌集」浅き流れほか▼萱野笛子・刊本「詩集」音の自画像ほか▼今井

盛章・刊本「父の償い」▼横川正郎・刊本「歌集」米花▼近澤杉車・刊本「句集」の実▼森下時夫・刊本「隨筆」

このほか、多くの方々からご寄贈を頂きました。紙面を借りて御礼申しあげます。

いたいた資料のなかから、特に「落城」シリーズ未発表原稿や、「赤い椿の花」取材ノートなどの創作資料を中心に展示。◆23日 「土佐日記」

過程を探る」を開幕(11月29日までを予定)。二階常設展示室内にてコーナー展示。※新たに寄託

記念講演会「人と文学」  
「大原富枝と文学」記念講演会  
「漱石と芥川—その接点と差異—」

# 高知県立文学館カレンダー

1998年

10~12月

10月—October

11月—November

12月—December

## 常設展示

## ミニ企画展

[田宮虎彦・作品誕生の過程を探る]——11月29日まで予定  
 「落城」シリーズストーリー展開表や未発表原稿、絶筆「チボ一家の人々」などの貴重資料を展示。田宮文学の創作過程がご覧いただけます。



岡本弥太  
(1899~1942)



大江満雄  
(1906~1991)

## 文学カレッジ

土佐文学への理解をさらにふかめていただけるよう、毎日1回の連続講座を開催しています。

\*いずれも13:30~15:00

\*文学館1Fホールにて

注)この講座の募集はすでに締め切っております。

●第2回文学カレッジ  
「土佐の三大詩人一片山・岡本・大江について」

\*日時：10月10日(土)

\*講師：片岡文雄氏(詩人)



一片山敏彦  
(1898~1961)

## 催し物

## 秋の企画展——[ヴィジョネール・片山敏彦の世界展]

10月10日(祝)~12月13日(日)

## 特別企画展

## 次回特別企画展予告

平成11年2月6日(土)~3月7日(日)

## 「智恵子抄展」

(詩人であり、彫刻家でもあった高村光太郎とその妻・智恵子。ふたりの愛の世界は、詩集『智恵子抄』でいまなお読み続けられています。精神を病み、言葉を失ってしまった智恵子が作り続けたたくさんの紙絵は、智恵子の光太郎へのメッセージであり、ひとつの芸術作品でもありました。その紙絵作品100点を中心に、光太郎の彫刻作品や詩原稿など、詩の世界をふかく味わっていただける資料を紹介します。)

【休館日】10月——5, 12, 19, 26 11月——2, 9, 16, 24, 30 12月——7, 14, 21, 26~31(1月2日より開館)

## 利用案内

開館時間 午前9時~午後5時(入館は、午後4時30分まで)

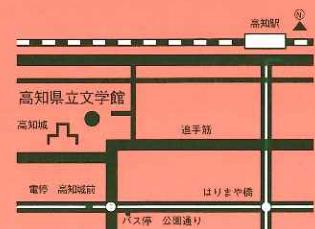
休館日 毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)  
年末年始(12月26日~1月1日)

観覧料 一般300円  
特別企画展のあるときは、料金が変わります。  
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県長寿手帳所持者及び身体障害者手帳(1・2級)療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

## 交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城下車北へ徒歩4分
- バス停公園通り下車北へ徒歩4分

高知県立  
文学館

高知市丸ノ内1丁目1~20  
電話 0888-22-0231  
FAX 0888-71-7857  
〒780-0850